

## “Playing the Governor’s Lady to the *Blackies*” — 『ジャマイカ滞在記』における人種、ジェンダー、ナショナルティ —

志 渡 岡 理 恵

### 1. はじめに

植民時時代のアメリカに生まれ、イギリスで育ったマライア・ニュージェント (Maria Nugent) は、1801年、当時イギリスの植民地であったジャマイカ (Jamaica) に総督として赴任する陸軍軍人の夫ジョージ (George) に同行して海を渡った。彼女はジャマイカでの5年間の暮らしを日記に記し、その日記は彼女が亡くなって5年後の1839年にインド (India) 滞在中 (1811-1815) に書かれた日記とあわせて私家版として印刷された。その後、20世紀にはジャマイカ日記 (以後、『ジャマイカ滞在記』と記す) にインド日記の抜粋を付けた版 (1907) をはじめとして、いくつかの版が出版されている。

マライア・ニュージェントの『ジャマイカ滞在記』は、19世紀初頭にジャマイカで生活した女性の記録として貴重なものである。イギリスで娯楽としての旅行が一般的になるのは19世紀中葉、トマス・クック (Thomas Cook) が旅行会社をつくり、団体旅行を扱い始めてからのことで、当時ジャマイカは気軽に出掛けられるような場所ではなかった。また、マライアのように親族に同行した女性が少なからずいたとしても、その記録を残した例はほとんどない (少なくとも現時点では存在が確認されていない)。奴隷制が目に見えるかたちで存在していたジャマイカという場所を一般のイギリス女性がどのように捉え、そこに生きる人々とどのような関係を築いたのか、知る手がかりは少ないのである。

このような資料としての希少性に加え、『ジャマイカ滞在記』は女性の私的な記録であるがゆえに、公的な記録からはこぼれ落ちてしまいがちな事柄をも含んでいて、この作品を読む行為は、歴史の現場での人間関係の機微に触れ、一義的な歴史理解を修正する可能性を持っている。総督夫人であり、夫の仕事を積極的に手伝っていたマライアは、農園視察に同行して、奴隷監督の愛人や使用人をはじめとする農園の女性たちから様々な話を聞いている。彼女の日記には、黒人や混血の女性たちの証言が生々しく記されているのだ。また、彼女は、黒人と白人の不平等な裁判や、ハイチ革命でジャマイカに逃げてきたフランス兵の処遇にも関心を持ち、決定が下されるまでに夫と部下たち

の間で交わされた議論も記録している。農園主たちを招いての舞踏会の箇所からは、植民地行政府内における力関係が垣間見える。このように、『ジャマイカ滞在記』では、当時のカリブ海域の複雑な政治状況を公文書とはまた別の角度から照らし出すような記述が多く見られるのである。彼女の日記は子孫が読み継いでいくことだけを想定して書かれたものであり、公刊を念頭に置いていないため、レディとしての節度は守りつつも比較的自由に書かれていて、彼女の生の声に近いものを聞くことができる。

本稿は、このような性質を持つ『ジャマイカ滞在記』における人種とジェンダー、ナショナルティの問題について考察する。マライア・ニュージェントはどのような位置からジャマイカ社会を見つめ、そこに生きる人々とどのような関係を築いたのだろうか。

## 2. “We are soldiers” — マライアの自己規定

まずは、マライア・ニュージェントの家系と経歴を辿ることにより、彼女が当時の社会の中で占めていた位置を確認し、彼女自身がどのような自己規定を行っているのか見ていきたい。マライアは、アメリカが独立する前の1771年、ニュージャージー（New Jersey）に生まれた。父方の祖父ウィリアム・スキナー（William Skinner）はスコットランド（Scotland）出身だったが、1715年のジャコバイトの反乱に敗れ、アメリカに逃れた。彼はそこでオランダから移住してきた女性と結婚し、生まれた息子（マライアの父）はアイルランド移民3世の女性（マライアの母）と結婚、12人の子どもをもうけた。その5番目の娘がマライアである。やがてアメリカ独立戦争が勃発すると、スキナー家はイギリス側につき、敗戦後はイギリスへ移住することになる。一家はロンドン（London）、リヴァプール（Liverpool）と並んで18世紀奴隷貿易の中心都市だったプリストル（Bristol）などで暮らす。アイルランド（Ireland）にも土地を所有していて、マライアは1797年にベルファスト（Belfast）で結婚する前、そこに住んでいたと考えられている。

ジャコバイトの反乱とアメリカ独立戦争—この2つの戦いで、スキナー家は前者ではスチュアート（Stuart）家側に、後者ではイギリス側についたわけだが、彼らはどのような帰属意識をもっていたのだろうか。それはおそらく世代によって大きく異なっていたのではないだろうか。スコットランドのマグレガー（MacGregor）族出身で、ジャコバイトの反乱に加わったマライアの祖父は、故郷スコットランドに深い愛着を感じていたに違いない。

そのように想像させる一節がマライアの『ジャマイカ滞在記』の最後に近い部分にある。ジャマイカから帰国した後、スコットランドを訪れたニュージェント一家は、ジャコバイトの反乱からすでに半世紀以上が経過しているにもかかわらず、次のような歓待を受ける。

We were much amused with the clannish histories, &c.; and with hearing all the Jacobite feelings and prejudices descanted upon, just as if it was in the years 15 and 45. In the drawing room, and in Lady Murray’s dressing room there were portraits of Prince Charles; and General N., I am sure, shocked the whole party very much, by calling him the Pretender; for he was immediately corrected by the lady of the house, who said, “Prince Charles, if you please.” I saw, too, a portrait of my dear father, among many others of the MacGregor Clan, and although a wooden sort of painting, it is something of a

likeness. (272)

スコットランドではクラン (clan) の結びつきが強く、一族の歴史やジャコバイトの反乱の話が大切に語り継がれていることが分かる一節である。中でも、マライアの夫ジョージが1745年の反乱を率いたチャールズ・エドワード・スチュアート (Charles Edward Stuart) を「僭称者」(“Pretender”) と呼び、即座に「チャールズ王子」(“Prince Charles”) と訂正するよう注意されるくんだり、ジャコバイトの反乱に対する2つの相反する見方を端的にあらわしていると言えるだろう。イギリス陸軍に所属するジョージの目から見ると、チャールズ王子は僭称者であるのに対し、スコットランドのマリー家の人々にとっては、王位継承権を正当に要求した「ハンサムなチャールズ王子」(Bonnie Prince Charles) である。この出来事に対するマライア自身の反応は書かれていないので想像するしかないが、この後、家系図を見せられ、自分の家系を誇りに思うように言われた時の淡々とした記述から考えると、父方の一族の出身地としてそれなりの親しみと興味を抱いているものの、マライアのスコットランドに対する帰属意識はそれほど強くはないようである。

それでは、アイルランドについてはどうなのだろうか。マライアの母方の一族はアイルランド出身で、マライア自身もしばらくの間アイルランドで暮らしている。また、そこで生涯の伴侶となるジョージと出会って結婚している。夫ジョージはアイルランド貴族の私生児で、ジャマイカに赴任する直前は、1798年のアイルランド反乱を平定する任務に就いていた。彼女にとって、アイルランドは縁の深い場所であったと言える。

しかし、マライアはアイルランドに良い印象は持っていなかったようである。たとえば、『ジャマイカ滞在記』の冒頭ではアイルランドで暮らした数年間を振り返って次のように書いている。

I must preface my intended Journal by saying that it commences immediately after we had terminated a residence of some years in Ireland, of which we were both heartily sick, tired, and disgusted; having witnessed during the Rebellion, which broke out in 1798, all the horrors of a civil war, during which my dear husband had the command in the north; so that he was not only obliged to meet the poor, infatuated, misguided people in the open field, but, after defeating them there, had also the distressing task of holding courts martial, and signing the death warrants of very many, which was indeed heart-breaking to us both. (1)

彼女がアイルランドでの日々心底うんざりし、疲れ果てたのは、夫が蜂起した人々と戦い、軍法会議で彼らに死刑を宣告しなくてはならなかったからだ。彼女の記述からは、反乱を起こした人々への怒りや憎しみは感じられないものの、「可哀想な、理性を失った、心得違いの人たち」(“the poor, infatuated, misguided people”) という表現には、彼らを憐れむような、見下すような、優しさと侮蔑の入り混じった感情が読みとれる。マライアにとって彼らは憐憫の対象でしかなく、両者の間には距離がある。

それでは、生まれた場所や祖先の故郷、住んでいた土地にそれほど強い愛着を持っていなかったマライアは、自分はどこに属しているという意識をもっていたのだろうか。その答えへの手掛かり

は、“...and, in short, I enjoyed my little abode so much, I should greatly have preferred remaining, instead of playing the Governor’s lady to the blackies: but we are soldiers, and must have no will of our own” (2) というマライアの言葉にある。これは、ジャマイカへ向けて出発する際に、イングランドを離れたくないという気持ちを抑え、自分の役割を果たそうと彼女が決意する箇所である。「私たちは兵士だから」(“we are soldiers”)という言葉からは、自らを夫と同一視し、自分も夫と同じく兵士であるという意識が感じ取れる。彼女の日記には「わが愛しの夫」(“my dear husband”)、「わが愛しのイングランド」(“my dear England”)という表現が頻繁に用いられているが、マライアの中では夫とイングランドは分かちがたく結びついていたようである。両者の結節点にあるのがイギリス陸軍である。彼女のように故郷と呼びうる国が複数あると、土地や人への愛着とはまた別のものが帰属感の軸となる場合もあるのかもしれない。マライアは、夫が所属するイギリス陸軍に強い帰属感を持っていたのではないかと思われる。

このようにイギリス陸軍の一員として自己を規定するマライアの目に、ジャマイカという場所はどのように映ったのだろうか。そして、植民地支配や奴隷制によって生じる人種間の軋轢や緊張関係の中で、このような位置に立つ彼女はどのような人間関係を築いていったのだろうか。

### 3. ジャマイカでの経験

1801年7月、ニュージェント夫妻はジャマイカに到着し、下院の向かい側にある総督邸に住む。マライアはこの地で総督邸の黒人の召使いや、ジャマイカに点在する農園で強制労働をさせられている黒人奴隷に接し、奴隷制の実態を知ることとなる。彼女が最初に密接に関わるのは、総督邸の召使いたちである。女主人として屋敷を取り仕切る立場となったマライアは、表面的には陽気だけれども、仕事をしながら召使いたちを見て、気前よく振る舞うことで彼らと良好な関係を築こうとする。

Reflect all night upon slavery, and make up my mind, that the want of exertion in the blackies must proceed from that cause. Assemble them together after breakfast, and talk to them a great deal, promising every kindness and indulgence. We parted excellent friends, and I think they have been rather more active in cleaning the house ever since. (14)

「慈悲深い」(benevolent) 主人となることで主従関係を良好に保とうとする態度は、階級制であれ、奴隷制であれ、その制度を温存しようとする側のひとつの典型的な態度である。イギリス陸軍の一員と自己を規定するマライアは、自らの最初の仕事としてこの奴隷制の穏便な保持に努めることになる。

彼女が屋敷の25人の召使いをキリスト教徒にしようと数度にわたって彼らにキリスト教の教えを説き、牧師を呼んで洗礼するのも、“After the usual breakfast, gave my last lecture to the blackies, and finished my Christian story. I consider them now so well acquainted with their expected duties, that I have appointed Rev. Mr. Warren to be here to-morrow, at 12, for the purpose of baptizing them” (38) という箇所から分かるように、奴隷制を温存するためである。マライアは召使いたちをキリスト教徒にする

にあたり、彼らがキリスト教の教えを理解することを重視しているが、それは彼らを自ら進んで熱心に働くように仕向けることを狙ったことである。ジャマイカに到着したばかりの彼女は、奴隷制の酷さを認識するような経験をまだしておらず、屋敷の黒人たちの表面的な陽気さから、“All day they have been singing odd songs, only interrupted by pearl of laughter; and indeed I must say, they have reason to be content, for they have many comforts and enjoyments. I only wish the poor Irish were half as well off” (53) と、むしろアイルランドの人々の方がはるかに憐れむべきだと考えている。この時点では、屋敷の黒人と主人一家の関係は、イギリスでの使用人と主人一家のそれとさして変わらないものとして捉えられている。ここには人間としての基本的な権利をすべて剥奪する奴隷制という制度自体を問題視する視点はまだ見られない。

しかし、農園視察で見聞きした黒人奴隷の惨状がマライアの奴隷制に対する認識を少しずつ変えていく。1802年2月24日、スパニッシュタウン (Spanish Town) から4マイルほど離れたミッチェル氏 (Mitchel) が所有する砂糖製造所を見学に行ったマライアは、奴隷監督から、奴隷が12時間連続で煮えたぎる大鍋の前で単調な仕事をさせられ、時には疲れ切って眠ってしまい、指が粉砕機に絡まって、斧で手を切断されることもあるという生々しい話を聞く。

Then there were several negroes employed in putting the sugar into the hogsheads. I asked the overseer how often his people were relieved. He said every twelve hours; but how dreadful to think of their standing twelve hours over a boiling cauldron, and doing the same thing; and he owned to me that sometimes they did fall asleep, and get their poor fingers into the mill; and he shewed me a hatchet, that was always ready to sever the whole limb, as the only means of saving the poor sufferer's life! I would not have a sugar estate for the world! (63)

「砂糖農園など決して持ちたくはない！」(“I would not have a sugar estate for the world!”) という最後の言葉からは、マライアが奴隷制の実態を垣間見たことにより、この制度がどれほど残酷な行為を許容するものとなりうるのかを理解し始めたことがうかがえる。

さらに、1802年3月10日に視察に訪れたゴールデン・グローヴ (Golden Grove) では、女性や子供の奴隷がひどい扱いを受けていることを聞き、マライアの奴隷制に対する嫌悪感は強まっていく。農園の家政婦によると、まだ小さな子供が母親から引き離されて砂糖キビ畑で草取りをさせられ、妊娠中の女性は出産の6週間前まで働かされたうえ、出産して2週間後には仕事に戻される。マライアは、奴隷制が人間を人間とみなさない制度であることを実感する。

奴隷制の実態を知るにつれ、マライアは奴隷制に関する知識を深めようとし、総督夫人としてどのように振舞うべきか考えるようになる。たとえば、1802年4月4日の日記には、人種差別むきだしの論調で悪名高いブライアン・エドワーズ (Bryan Edwards) の著作への言及があり、1802年4月8日には下院での奴隷貿易廃止に関する議論に興味深く読んだという記述がある。

Amused myself with reading the Evidence before the House of Commons, on the part of the petitions for the Abolition of the Slave Trade. As far as I at present see and can hear of the ill treatment of the

slaves, I think what they say upon the subject is very greatly exaggerated. . . . Yet it appears to me, there would be certainly no necessity for the Slave Trade, if religion, decency, and good order, were established among the negroes; if they could be prevailed upon to marry; and if white men would but set them a little better example. . . . but white men of all descriptions, married or single, live in a state of licentiousness with their female slaves; and until a great reformation takes place on their part, neither religion, decency nor morality, can be established among the negroes. (87)

奴隷制の実態を知るようになったとはいえ、マライアは総督夫人という立場にあり、何よりも夫、イギリス陸軍に強い帰属意識を持っている。奴隷制自体を廃止すると、植民地経営がたちゆかなくなるという思いもあったのだろう。それに、奴隷貿易船の悲惨な状況は見たことがなかったに違いない。彼女が日々の生活の中で目にするのは屋敷の黒人の召使いたちであり、前述したように、気前よく振る舞う女主人のもとで彼らは少なくとも表面上は陽気で幸せそうに暮らしている。彼女が可能な限り黒人奴隷の置かれている状況を改善することが最善の策だと考えても不思議ではない。また、1802年4月24日の日記では、あらゆる階級の西洋人に黒人は人間であり、魂を持っていると納得させるのは大変難しいと嘆いてはいるものの、マライアがここで述べている奴隷貿易の必要性を無くすための方策—奴隷同士を結婚させて子どもをもうけさせる—には、黒人奴隷を家畜の繁殖と同じように考えていることがうかがえ、彼女が根底では黒人を同胞とは見なしていないことが分かる。

だが、マライアは白人の優越を無条件に信じ込んでいるわけではない。先の引用の最後の部分では、白人男性が女性の奴隷を性的に搾取していることを批判しており、農園視察で白人男性が例外なく複数の愛人を持っているのを目にして強い嫌悪感をあらわしている。1801年10月1日、ハッチンソン氏 (Hatchinson) の農園に出かけたマライアは、奴隷監督の愛人や子供たちと会話を交わした際のことを次のように記している。

The overseer’s *chère amie*, and no man here without one, is a tall black woman, well made, with a very flat nose, thick lips, and a skin of ebony, highly polished and shining. She shewed me her three yellow children, and said, with some ostentation, she should soon have another. The marked attention of the other women, plainly proved her to be the favourite Sultana of this vulgar, ugly, Scotch Sultan, who is about fifty, clumsy, ill made, and dirty. He had a dingy, sallow-brown complexion, and only two yellow discoloured tusks, by way of teeth. (29)

ハーレムを有するイスラム教国の君主に奴隷監督を喩えた「この下品で醜いスコットランドのサルタン」(“this vulgar, ugly, Scotch Sultan”) という一節には、マライアの彼に対する強い嫌悪が感じられる。シャーロット・ブロンテ (Charlotte Brontë) の『ジェイン・エア』(*Jane Eyre*, 1847) においてもジャマイカ出身の妻を持つロチェスター (Rochester) がサルタンのイメージで描かれ、彼のサルタン的な発言にジェインが強く反発する場面があるが、西インド諸島の白人男性の性的放縦をイギリスの白人女性が嫌悪するという構図は、特に19世紀前半には広く見られるものである。マラ

イアは彼らのそのような行為に不快感を持ちながらも、夫がジャマイカで総督としての任務を円滑にこなしていくために、この地の有力者である農園主たちと友好的な関係を保つことを考えなくてはならない。農園視察を重ねるにつれ、彼女は白人男性の性的放縦をやがて諦めの気持ちで眺めるようになる。

そのような白人男性の墮落した暮らしぶりに加え、厳しい暑さの続く慣れない気候、カリブ海域の政治的緊張などが徐々にマライアを追い詰めていく。1802年12月25日の日記には、風邪をひいたわけではないのに彼女は突然声が出なくなり、医師に精神的なものでしょうと診断されたと書かれている。さらに、ハイチ (Haiti) 革命後の緊張がジャマイカでも一気に高まると、表面的でしかなかったマライアと黒人たちとの友好関係は崩れ、1805年4月2日には次のような出来事が日記に記されている。

We met a horrid looking black man, who passed us several times, without making any bow, although I recollected him as one of our boatmen of the canoe we used to go out in, before we had the *Maria*. He was then very humble, but to-night he only grinned, and gave us a sort of fierce look, that struck me with a terror I could not shake off. (225)

それまで自分たち一家に対して恭しい態度をとってきた黒人男性が、悪意があることをまるで見せつけるかのように、にやりと笑い、恐ろしい顔つきをしたのを見て、マライアが恐怖を覚えたというこのエピソードからは、一方を同じ人間とはみなさない奴隷制という制度のもとでは、両者の間に真の信頼関係は築けなかったことが分かる。間もなく、身の危険を切実に感じるようになったマライア達は逃げるようにイギリスへ帰っていくことになる。

帰国後、夫のジョージはジャマイカでの功績が認められて准男爵となり、一家は屋敷を購入するが、すぐに今度はインドへ赴任することになる。このジョージ・ニュージェントの経歴をみると、当時のイギリスで植民地がどのような場として機能していたか、その一端をうかがい知ることができる。ジョージ・ニュージェントは私生児だったため、軍人として功績をあげることでイギリス社会での地位を上昇させるしかなかった。まずはアイルランドで、次にジャマイカで、そしてインドで。植民地での功績とそこで得た富を元に、彼はイギリスで爵位を得て、社会的地位を上げていった。遺産相続人でない多くの男性にとって、植民地はイギリスで出世していくチャンスを提供してくれる場所であったと言える。次節では、19世紀初頭の軍人の社会的地位とイメージの変化について検討するために、作品の執筆時期や時代設定が『ジャマイカ滞在記』と近いジェイン・オースティン (Jane Austen) の最後の小説『説得』 (*Persuasion*) (1818) に目を移してみることにしよう。

#### 4. 軍人の妻という選択

オースティンの死後出版された『説得』は、主人公アン (Anne) の父親で准男爵のウォルター・エリオット卿 (Sir Walter Elliot) の人物描写から始まる。ウォルター卿は准男爵という地位を何よりも誇りに思い、心の拠り所になっている。

Sir Walter Elliot, of Kellynch-hall, in Somersetshire, was a man who, for his amusement, never took up any book but the Baronetage; there he found occupation for an idle hour, and consolation in a distressed one; there his faculties were roused into admiration and respect, by contemplating the limited remnant of the earliest patents; there any unwelcome sensations, arising from domestic affairs, changed naturally into pity and contempt, as he turned over the almost endless creations of the last century—and there, if every other leaf were powerless, he could read his own history with an interest which never failed— this was the page at which the favourite volume always opened. . . . (9)

准男爵は貴族ではないものの、世襲の爵位である。エリオット家は、チャールズ2世が即位した1660年にこの爵位を授けられた由緒正しき一族で、18世紀になってやたらと増えた新興の准男爵家とは格が違くと、ウォルター卿は思っている。

しかし、「家政が原因の不愉快な思い」(“any unwelcome sensations, arising from domestic affairs”)という表現で示唆されているように、エリオット家には翳りが見え始めている。ウォルター卿の浪費のせいで、代々受け継いできた財産をそのままのかたちで次世代に受け渡すことが危ぶまれているのだ。この苦境を乗り切る策すら講じられない彼は、賢明な次女アンをはじめとする周囲の勧めにしゅしぶ従い、海軍の提督に屋敷を貸すことで家計の危機をしのぐ決断をする。そして、これを機に、一度は引き裂かれたアンとウェントワース大佐 (Captain Wentworth) の愛の物語が新たな展開を迎えることとなる。

8年近くの時を経て再会した2人の微妙な心理の変化を丁寧に描いたこの小説では、移りゆく時と、それにとまなう心の成熟が前景化されたテーマであるには違いないにしても、『説得』のメインプロットを支えているのは、准男爵と海軍軍人という2つの社会的地位の差異と、その変化である。出会った頃 (1806年) のアンとウェントワースを引き離したのは、2人が属する社会の違いを理由とする周囲の強硬な反対だった。当時、ウェントワースはカリブ海での功績が認められて中佐に任ぜられてはいたものの、さしたる財産も縁故もなかった。その後、エリオット家の経済状況が悪化していくのとは対照的に、彼は海戦で次々に勝利し、財産を築いていく。零落の兆候を見せ始めた准男爵と、めざましい勢いで社会的地位を上昇させていく海軍軍人—大英帝国拡張期であるこの時代、国における軍人の重要性は増し、彼らの社会的影響力も大きくなっていった。ウォルター卿の屋敷が海軍提督に貸し出されるのは象徴的である。

アンが結婚相手として選ぶのが父親の准男爵の地位と財産を継承する男性ではなく、海軍軍人に設定されているのは、こうした時代背景を反映しているとも考えられる。しかし、作品の最後でさりげなく強調されているのは、軍人が国にとって重要な存在であるということよりも、家庭人として優れているということである。

Anne was tenderness itself, and she had the full worth of it in Captain Wentworth’s affection. His profession was all that could ever make her friends wish that tenderness less; the dread of a future war all that could dim her sunshine. She gloried in being a sailor’s wife, but she must pay the tax of quick alarm for belonging to that profession which is, if possible, more distinguished in its domestic virtues

than in its national importance. (237)

アンは「海軍軍人の妻」(“a sailor’s wife”)であることに誇りを感じているが、それは海軍軍人が家庭を大事にすることで名高いからであるという含みが、この最後の部分にはある。『説得』には、家庭を大事にする海軍軍人が複数登場する。マライア・ニュージェントも家族を大切にしている陸軍軍人の夫への愛を毎日のように日記に書き記しているが、ともに軍人の妻であるマライアとアンがこのような態度を共有しているということは、軍人に対してそのようなイメージを抱いている人々が当時少なくなかったということだろう。マライアやアンの軍人の妻というアイデンティティの根幹をなすのは、家庭を大切に、故国のために戦う夫への愛情である。

## 5. おわりに

植民地支配によりすでにグローバル社会となっていた18世紀イギリスで、植民地時代のアメリカに生まれ、スコットランド、オランダ、アイルランド出身の祖先をもち、アイルランド、イングランド、ジャマイカ、インドで暮らしたマライア・ニュージェントは、夫の所属するイギリス陸軍に最も強い帰属意識を持ち、軍人の妻としての立場を最も重要視して生涯を送った。彼女にとって、生まれた場所や祖先の故郷、暮らした場所はアイデンティティの拠り所とはならなかった。『ジャマイカ滞在記』は、19世紀初頭の植民地ジャマイカで、奴隷制度のもと、イギリス軍人の妻として人々とどのように関わるべきか、いかに振る舞うべきかを模索し続けたひとりの女性の生の記録である。

## 参考文献

- Austen, Jane. *Persuasion*. Oxford: Oxford UP, 1998.
- Beckles, Hilary McD., *Centering Woman: Gender Discourse in Caribbean Slave Society*. Kingston: Ian Randle Publishers, 1999.
- Beckles, Hilary McD, and Verene A. Shepherd, eds. *A Historical Study of Women in Jamaica 1655-1844*. Kingston; The U of the West Indies P, 2006.
- Buckridge, Steeve O. *The Language of Dress: Resistance and Accommodation in Jamaica, 1770-1890*. Kingston: The U of the West Indies P, 2004.
- Cohen, Monica. “Persuading the Navy Home: Austen and Married Women’s Professional Property.” *Novel* 29.3 (1996): 346-66.
- Colley, Linda. *Captives: The Story of Britain’s Pursuit of Empire and How its Soldiers and Civilians were Held Captive by the Dream of Global Supremacy 1600-1850*. New York: Pantheon Books, 2002.
- Favret, Mary. “Everyday War.” *ELH* 72.3 (2005): 605-33.
- Ferguson, Moira. *Subject to Others: British Women Writers and Colonial Slavery, 1670-1834*. London: Routledge, 1992.
- Fermor-Hesketh, Robert, ed. *Architecture of the British Empire*. New York: The Vendome P, 1986.

- Fraiman, Susan. “Jane Austen and Edward Said: Gender, Culture, and Imperialism.” *Critical Inquiry* 21. (1995): 805-21.
- Frey, Anne. “A Nation Without Nationalism: The Reorganization of Feeling in Austen’s *Persuasion*.” *Novel* 38.2-3 (2005): 214-34.
- Harris, Jocelyn. “Domestic Virtues and National Importance’: Lord Nelson, Captain Wentworth, and the English Napoleonic War Hero.” *Eighteenth-Century Fiction* 19.1-2 (2006-7): 181-205.
- James, C. L. R. *The Black Jacobins: Toussant L’Ouverture and the San Domingo Revolution*. 1938; London: Penguin Books, 2001.
- Klepp, Susan E, and Roderick A. McDonald. “Inscribing Experience: An American Working Woman and an English Gentlewoman Encounter Jamaica’s Slave Society, 1801-1805.” *William and Mary Quarterly* 58.3 (2001): 637-60.
- Levine, Philippa, ed. *Gender and Empire*. Oxford: Oxford UP, 2004.
- Midgley Clare. *Women against Slavery: The British Campaigns 1780-1870*. 1992; London: Routledge, 1995.
- Nugent, Maria. *Lady Nugent’s Journal of Her Residence in Jamaica from 1801 to 1805*. Ed. Philip Wright. Kingston; The U of the West Indies P, 2002.
- Park, You-me, and Rajeswari Sunder Rajan, ed. *The Postcolonial Jane Austen*. London: Routledge, 2000.
- Paton, Diana. “Gender, Language, Violence and Slavery: Insult in Jamaica, 1800-1838.” *Gender and History* 18.2 (2006): 246-65.
- Said, Edward. *Culture and Imperialism*. 1993; New York: Vintage Books, 1994.
- Shea, Anne. “Property in the White Self: Assessing Lady Maria Nugent’s *Jamaican Journal*.” *Women’s Studies* 30. (2001): 175-97.
- Southam, Brian. *Jane Austen and the Navy*. London: National Maritime Museum, 2005.
- Tomalin, Claire. *Jane Austen: A Life*. 1997; New York, Vintage Books, 1999.
- Todd, Janet. *Jane Austen in Context*. Cambridge, Cambridge UP, 2005.
- Trumpener Katie. *Bardic Nationalism: The Romantic Novel and the British Empire*. Princeton: Princeton UP, 1997.
- Watson, Tim. *Caribbean Culture and British Fiction in the Atlantic World, 1780-1870*. Cambridge: Cambridge UP, 2008.
- White, Gabrielle D. V. *Jane Austen in the Context of Abolition: ‘a fling at the slave trade’*. New York: Palgrave Macmillan, 2006.
- Wilson, Kathleen, ed. *A New Imperial History: Culture, Identity and Modernity in Britain and the Empire 1660-1840*. Cambridge: Cambridge UP, 2004.
- 富山 太佳夫 「歴史記述はどこまで文学か」『岩波講座文学4フィクションか歴史か』岩波書店, 2002, 17-40.